



子どもの育ちには「密」がどうしても必要です

園長 野中 泉

日に日にあたたかくなり、園庭を走る子どもたちの服装もずいぶん薄着になりました。駐車場の小さな桜も、地域の方が分けてくださったプランターの花も、卒園児が残してくれたチューリップも満開です。今年もアトムに新しい春がやってきました。

毎年4月の新入園児を迎えるにあたっては、3月に新入の子どもと保護者ひとりひとりと入園前のお話をさせてもらいます。その中で、今年は、2歳までのお母さんの多くが、「生まれてから、家族以外の人とほとんど接したことがないんです」「コロナがあったから、公園とかで他の子と遊ばせた経験がなくて」と心配を口にしたことに、少なからずショックを受けています。もちろん、これまでも、入園前の小さな子の中には、家族以外の人とあまり接していない子もいました。でも、コロナ以降に生まれた子のほとんどが家族以外の他人と接した経験がないという事実を目の当たりにして、改めてコロナというひとつのウイルスが私たちの社会から、子どもの育ちの時間から奪っていることの大きさに愕然とするのです。

私たちが、「コロナ」という未知のウイルスの渦に突如巻き込まれたのは2020年初春のことです。ウイルスの特徴も対策も何もわからない混乱の中で教えられた『3密を避ける』という行動原則。もちろん「密閉、密集、密接」を避けることは、感染症対策としては、とても大事なことです。でも、保育園という場所からコロナと向き合い続けた丸2年の月日を経て、改めて、ひとが育つためには「密接な人間関係」は、やはり不可欠だとしか、思えずにいます。

少し、話しは変わりますが、先日、あることをきっかけに、豊中のあけぼの学園という法人を知り、そのホームページを拝見したのですが、理念のひとつに掲げていらっしゃることに、とても驚き、そして大きく感銘を受けました。そこに、「子どもには、ケガをする権利がある」という言葉があったことにです。子どもはケガをすることがあります。とか、ケガもやむを得ないではなく、ケガをする権利があるとはっきりと言い切る、その強さと覚悟に、どんと背中をおされたように感じました。

この長いコロナ禍においても全国各地に子どもにとって大事なことをあきらめない先達や仲間たちがいます。コロナ禍でも、子どもを産み孤独な子育てに立ち向かっている沢山のお母さんたちがいます。コロナ禍だって、一日、一日大きくなっていく元気な子どもたちがいます。コロナ禍だからと言って、人生に起こる様々な試練は待ってくれません。自粛中でも一旦停止も巻き戻しもできない大事なひとりひとりの人生が、今日も、ちゃんと動いています。アトムの理念は「ひととしての育ちを保障し、地域の子育て拠点をめざします」です。アトムがめざす「子育てを通して、子どもだけでなく大人も育ちあう保育園づくり」は、コロナが終息したいつか先の未来に実現すればよいのではなく、今こそ必要なだと、改めて思わずにはいられません。

前述のあけぼの学園の理念には、こんな文章が続きます。『子どもたちは能動的な遊びの中で様々なケガに遭遇し、その経験から慎重さを身に付けます。そのような意味で「小さなケガは大きなケガの最大の予防」であると考えています。大らかな大人の見守りの中で、心ゆくまで遊び様々なケガの経験をすることが育ちには重要だと考えています。』その一文、一文に深く共感し、改めて勇気をもらいます。

今日からまた、新しい年度が始まります。コロナとつきあいながらの園生活も継続です。でも、今年は「子どもたちの毎日には、密が避けられないことがあります」ではなく、「子どもたちの毎日には、どうしても密が必要です」と、言い直すことから、一步を踏み出したいと思っています。